

平成新山大火砕流（火山国日本の最大級の火山災害－43 名に及ぶ犠牲者）

概要：「島原大変・肥後迷惑」1792 年、約 1.5 万人の犠牲から、約 200 年後の 1991 年 6 月、巨大な溶岩ドームが崩壊「平成新山の大火砕流」が発生し、報道陣と消防警察等の関係者 46 名の犠牲者を出すとともに、30m/s（時速 100km 以上）速さの火砕流は一挙に有明海まで駆落ち、15km² に及ぶ地域を全滅させました。

【参考施設】「がまだすドーム（雲仙岳災害記念館-〒855-0879 島原市平成町 1-1）」

『平成の大噴火― その時何が起ったのか。』；<https://udmh.jp/eruption/>



平成新山の成長



1991 年 5 月



1991 年 12 月



1993 年 12 月

【参考資料】「U チューブ「ウェザーニュース【火山解説】」」：<https://www.youtube.com/watch?v=4xPicJeu2Wk>

1 平成新山の成長

1990 年末に普賢岳火口東側 600m、100m 下方山腹から小規模の水蒸気爆発が観測され、噴出マグマによる溶岩ドーム形成（1991 年 5 月確認）へと火山活動が活発化する。

溶岩ドームは成長と崩壊を繰り返し、自然災害のリアルタイム進行状況観察機会として、火山科学は当然として、マスコミの格好の対象となりました。

2 大火砕流発生メカニズムと犠牲者

山体崩壊を発生させた江戸中期の眉山同様、溶岩ドームは（粘り気の強い安山岩質のマグマが地上に押し出され、釣鐘状に固まりで、非常に脆い山体を形成）であるため、マグマが供給される限り、ドームの供給と崩壊は繰返され、ドーム形成の微妙な条件の違いにより、通常ではあり得ない程の溶岩ドーム規模まで成長をすることがあります。

1991 年 6 月 3 日、巨大化した溶岩ドームは一挙に不安定化して、崩落し、大火砕流となって高速・高温の猛威となって流域の全てを焼き尽くすこととなりました。

自然災害の生々しい現場を届けようと意気込んでいた多くのマスコミ取材員は、警察・

消防の避難勧告に従わず、火砕流観測場所に留まり取材継続していたために、大火砕流に吞込まれ、16 名が犠牲となりました。又、マスコミ関係者の行動に連動した消防・警察・タクシー運転手など 18 名が犠牲となりました。（その他、調査研究 3 名及び住民 6 名）

3 現在の平成新山の状況

1995 年、新たなマグマ供給による火山噴火活動は停止したと判断され「噴火終息宣言」が発表されました。

しかしながら、溶岩ドームは只でさえ脆く崩壊し易い特徴がありますが、平成新山は熱や火山ガスによる風化が進み、底部の岩石強度が低下しているため、現在は噴火による崩壊ではなく、「大雨」や「大規模な地震」をきっかけとした大規模な斜面崩壊「岩屑・ガンツ雪崩、眉山山体崩壊と同様」を起こす危険性が指摘されています。

このため、崩壊による災害の最小化のために各種砂防ダムの建設、火砕流路の改修・改造、道路の高架化等の防災工事を多角的に推進するとともに、「国土交通省の砂防管理センター」などが現在も監視カメラや特殊なレーダー（GB-SAR）を用いて、24 時間体制でドームの微小な動きや崩壊の兆候を継続的に監視しています